

第54回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

愛のドングリ

滋賀県 草津市立草津中学校 一学年

甲斐 珠姫

私は、生命保険にあまり良い印象がありませんでした。

なぜなら生命保険とは、命と引き換えに金銭を得るものだからです。テレビドラマやミステリー小説の世界では、生命保険が揉めごとの発端となつてストーリーが進んでいく作品もあり、人の心を惑わせる怖い存在だと思つていました。

にもかかわらず私は、母の生命保険の受取人なのです。なぜ母は、そんな怖いものの受取人に私を選んだのでしょうか。母の答えは、こうでした。

「正しく生きて、法律や神様や仏様が、守ってくれるとは限らない。」

最初はこの言葉の意味が理解できずにいましたが、話を重ねるうちに深く納得することができました。

家族を亡くして胸が張り裂けんばかりの苦しみに何日も眠れず、何日も食べ物や喉を通らず、何も手につかず、息をするだけで精一杯の状態だとしても、料金を支払えなければ電気やガスや水道は止められてしまいます。税金を支払えなければ、楽しい思い出の詰まった家財道具や幸せなときを過ごした家さえも、差し押さえられ取り上げられてしまうのです。

残された者が、これから生きるために必要かどうかなど関係ありません。道に空き缶が落ちていけば、拾い上げて自分の家のごみ箱に捨ててきた。電車に乗れば、お年寄りや具合の悪そうな人には席を譲ってきた。人が嫌がるような面倒臭いことや自分の利益にならないことも、積極的に引き受けてきた。ひたすら真面目に正直に、日々を歩んできた。そんなことは、何の助けにもならないのです。

憔悴した体を気遣い、優しく寄り添い、温かい言葉で支えてくれた友人、知人達もひと月もすれば、「強くなるしかない。乗り越えるしかない。みんなそれぞれ辛いことを我慢して頑張っている。あなたは、甘えている。」と、言うかもしれません。

生命保険とは、大切な家族の死という簡単には受け入れ難い状況の中で、悲しみの感情に支配されてしまったとき、ただじつとその場にうずくまり、大きく開いた心の傷口にかさぶたが張るまで、安静に過ごす時間を確保するために誕生したのではないかと思いました。

第54回中学生作文コンクール

たとえるならば、野生動物が冬眠する前に巣穴にためこむドングリのようなものでしょうか。

寒い冬の後には必ず春がやって来ると信じて、ドングリを食べて眠りにつく。目が覚めて辺りを見渡したとき、雪は解けてなくなり、花は咲き、蝶は飛びまわり、暖かな風を感じられたら、安心して外へ出ればいいのです。もし春はまだだと思つたなら、無理をしなくていいのです。寝床に戻り、またドングリを食べて、もうひと眠りすればいいのです。

世の中は厳しい。一つのきっかけから、悲しみの連鎖が起こることもあります。誰も信じられずに孤独感や不安感に苛まれ、絶望感に押し潰されそうになつてしまったら、何もせずに眠るのです。

ドングリがあれば、焦らずゆっくりと、心に春が訪れるのを待つことができます。

生命保険は、残された人への、愛のドングリなのです。